

偉人たちの史実と小説の間（改訂版）

2021年7月25日

我部山 民樹

目次

1. はじめに	2
2. 利休は切腹していなかった？	3
3. 政宗は弟を殺していなかった？	28
4. 空海のある一面	33
5. 家光の生母は春日局？	36
6. 豊臣秀頼の父親は秀吉ではなかった？	41
7. 宇佐八幡宮神託事件と道鏡	43
8. 「女地頭次郎法師」と「井伊次郎直虎」	44
9. 北の庄城は炎上しなかった？（偉人ではないが）	46

1. はじめに

歴史小説が必ずしも史実（歴史的事実）に忠実でなければならないということは決してないが、物語として面白くするために作られたフィクションが史実になってしまうのは問題だと思われる。偉人たちは明確な史実によりか確定している人物像と小説や伝説などで作り上げられた人物像の間に真の人物像が浮かび上がるはずである。新しい史料が発見されてきているので、専門家がその史料を折り込んで、歴史を見直して頂けることを期待している。

それ以前に専門家が史料では不明確な話をまるで史実かのように、我々に説明してくれるのはもっと問題である。

歴史家の中で異論を唱える人が出て、大方の歴史家はその反論を認めないし、具体的な反論や指摘をしないようだ。

あるとき、テレビでチャンネルを切り替えていたら、作家の伊東潤氏が「自分は空海、伊達政宗、利休を歴史上の3大ペテン師と呼んでいる。空海は宗教家というよりはエンターテイナーと言った方がよい」というような話をされているのを偶然見た。（と記憶している。自分の聞き間違いや記憶違いかもしれないと思いながら、それを何か書いているかもしれないと思い、調べてみたが分からなかった。が、これを前提に話を進める。）

意外？と思う反面、見方を変えればそうかもしれない、言い得て妙だと納得した記憶がある。目からウロコだと思った。類い稀な知識や技を巧みに操り、ときには曲者の姿、あるいはうさん臭い面をさらけ出すが、明るさを感じさせる快活さがある。それが魅力的と言える。見方によれば、周囲を納得させてしまう優れた才能を持った人物であるという誉め言葉とも解釈できる。

空海像



利休木像



政宗像



我々は面白可笑しく脚色した小説やドラマを通して偉人たちの人物像を描いているが、史実を追っていけば、また異なった人物像が見えてくるだろう。

3人とも並外れた才能を持ち、とてつもない成果を上げた英雄だ。しかし、曲者的であり、うさん臭さも併せ持っている。それが魅力でもある。対称軸は最澄と思われる。当時の日本の仏教界の第一人者であり、仏教への旺盛な探求

心を持ち、ひたすらに仏の教えを弟子や世に説いた。透明感があり、3人とは印象が異なるようだ。

偉人たちの人物像は史実と小説に代表されるフィクションの間にある。真相を探って、少しでも史実に近づけてみたい。

2.利休は切腹していなかった？

2-1. まえがき



千利休肖像画

千宗易（せんのそうえき、のちに利休）は戦国時代から安土桃山時代にかけての堺の豪商で、茶人でもあった。祖先は武士だったとされる。今井宗久、津田宗及と共に茶湯の天下三宗匠と称せられた。茶湯や茶道具を政治利用していた織田信長亡き後、豊臣秀吉に仕えた。秀吉も茶室と茶道具を政治利用したが、納屋衆（倉庫業）としての利休の情報収集力を買っていたとされている。利休も後ろ盾が必要であり、好きな政治にのめり込み政治的参謀として秀吉に仕え、秀吉、秀長に次ぐ政権 No. 3 の座に登りつめた。最大の後ろ盾の秀長死没後に、秀吉の逆鱗に触れ、処罰を受けて切腹したと伝えられている。（千宗佐の『利休由緒書』による）

千家流茶道の始祖と言われ、子孫が千家流茶道を確立し、今日の千家茶道の隆盛を迎えた。

切腹の理由はいろいろと憶測されているが、当時の史料が乏しく真相は分からないままである。賜死に値する咎はいまだに謎であることは衆目の一致するところである。

切腹ではなく実際は斬首されて、子孫が名誉を守るために‘切腹させられ、茶道に殉じた’ということに書き変えた可能性は否定できない。

追放後隠遁生活に入り、極秘にされた可能性も出てくる。そして、名誉を守るために切腹に書き変えた可能性もある。

切腹を探っていくと利休の曲者ぶりも見えてくる。

テレビの伊藤潤氏の 3 大ペテン師発言に引き続いて、司会者が「ところで利休は切腹したのでしょうか？その根拠は？」と問いかけ、それに対し「切腹したと思っている。当時の記録に切腹したとの記録は見つかっていないが、約半世紀後の江戸時代になって、利休の子孫・千宗佐が「利休は切腹した」と書き残しているの、そのように思っている。」という回答だったと記憶している。どのような番組であったか、また話の流れが分からなかったが、とにかく、‘当時の史料に書かれてなくても、後世の史料に書かれたことを信用する’ということに驚いた記憶がある。

話がそれるが、別の番組で歴史の大家・山本博文先生は司会者に「春日局、家光の生母説」について見解を聞かれ「後世の史料なので、徳川実紀に書かれている‘家光の生母は春日局である’というのは信用できない。家光の生母はお江（おごう）と思っている。徳川実紀にはあきらかな間違いが書かれていることもある。」と。

例えば、徳川実紀に‘従来、家光の生母は春日局としてきたが、実はお江が生母だった。’と後年になって書けば信用できないだろうが、その逆なのだ。‘実は春日局が生母だった’と嘘を書いても何のメリットもない。‘周知の事実だし、そろそろ潮時なので本当のことを書いた’とも解釈できるので、信用してもよさそうだが。

後世の史料に関してのお二人の話が真逆であり、専門家によって考え方が異なるのかと驚いた。

話を戻すと、それまでは切腹したという当時の史料が遺されているものと思いついていたし、あれほどの大切腹事件に、‘切腹した’という確かな記録が残されていないことにも驚いた。

以前、『利休切腹の謎』に書いたことがあるが、疑問が残るので再度調べることにした。ポイントは

- ・切腹を裏づける当時の資料がないし、後世の『千利休由緒書』にも切腹したとは書いているが決め手になる証拠が無い。千家と徳川家の都合のよいように書かれている可能性がある。後世に書かれた史料でも、例えば‘従来、名誉ある切腹だったと説明してきたが、実は隠遁だった。そして滞在先を示す史料を添付する’というのであれば信用できるが。
- ・衆目の一致するところ、死罪に値する咎が今もって謎である。
- ・政権側は邪魔になってきた利休を政治の表舞台から遠ざける必要があったことは間違いなからう。その理由もほぼ納得できる。
- ・約 60 年後に書かれた「千利休由緒書」は事実に基づいているか？
- ・死の直前に書かれたとされる遺偈（ゆいげ、辞世の句）の信憑性

当時の記録と「千利休由緒書」は1591年2月25日の利休の木像磔までの展開はほぼ一致しているし、不自然さは感じられない。「由緒書」の2月26日に上洛を命じられ、28日に切腹にいたるまでが急展開であり、当時の史料からは切腹を確認できない。逆に、『千利休由緒書』の信憑性を疑われる面もある。表に見える咎であれば’25日の木像磔刑により、利休を脅して追放処分とし、世間にも利休を処罰したことを知らしめる。’ことで終わったとしても納得できるストーリーだ。

当時の人々にとって利休の最後はそれまで謎だったが、約60年後になり『千利休由緒書』により‘利休が木像磔の翌日の26日に屋敷を3,000の軍勢に取り囲まれ、28日に切腹させられた’と初めて知ったときには驚きだっただろう。

驚くだけでなく切腹に値する咎が納得しかねるので、切腹にいたった経緯や咎をいろいろと憶測し、また芝居や物語ではいろいろと創作してきたのだろう。

その辺りの疑問点を整理にする。

2-2. 切腹に関する史料について

(1) 利休処罰に関する事件直後の資料(1591年)

① 日記、手紙の抜粋

❶ 2月29日の北野社家日記(きたのもりけー北野天満宮の宮司)

宋易が茶器の売買で不当な利益を得たかどで成敗され、首が木像とともに晒された。

❷ 2月29日の奈良興福寺の多門院英俊の日記(多門院日記)

2月28日明け方に数寄者(すきしゃ——芸道に執心な人)の利休が切腹したとの伝聞がある。それは近年、新たな茶道具に法外な値を付けて売り払っていて、不当な利益を上げる売僧(まいすー物を売って歩く墮落僧)の極みであるということとか、もっての外のことと関白秀吉殿が腹を立てて、磔刑だと仰せなのは、利休自身の木像を京都紫野大徳寺の山門に置いたことで、これが‘秀吉公もくぐるがある山門の上から見下ろすのは不敬にあたる事だとして罪に問われているから’である。

また、寿像を磔刑に処され、屋敷を売却し、高野山に登ったという風聞も聞いた。(全く異なる風聞)

❸ 2月29日の竹中半兵衛の子息竹中重門の記録(著書豊鑑(とよがみ))

(政権に近いところからの情報をベースにして)

その頃、秀吉公は茶の湯聖となっていた千利休を処刑した。彼は堺の町人であるが、秀吉公の茶の湯の師匠となった。世間で有名となって茶道具の良し悪しは「利休の思うがまま」に道具の値を上げ、富めることは秀吉公にも劣らないと言われるばかりに

なっている。段々傲慢になり、自分がよいと思うのは出来の悪い物も良い物とし、新物も古い物だと言って値を上げる始末だ。秀吉公はこれを聞いて国賊だと言って、利休を京都から堺の町に帰らせて、斬首刑に処した。奢れる者は今も昔もこのような末路だ。これを見て、今の世の中の人もこれからの人も戒めとするべきだ。

④ 2月29日の伊達家の家臣鈴木新兵衛の伊達家重臣石母田景頼への書状

利休の無道の年月を清められて、追放となりその行方も分からない。

聚楽第大門前にある堀川の戻り橋で利休の木像が礫になっている。前代未聞のこと。京都中で評判となっている。その脇には利休の罪科が書かれて、立てかけています。面白い秀吉様のお言葉、これに勝るものはない。

⑤ 伊達藩重臣で、後に亙理伊達藩の当主になった伊達成實の日記

利休が追放処分された後、行方不明になっている。

⑥ 2月25日の西洞院時慶(にしのとくいんときよし)の日記

宋易が逐電した。

(同じ日に)奈良で盗賊が捕えられ、京都で処刑され、さらし首になった。

⑦ 2月26日の公家の勸修寺晴豊(がじゅういんはれとよ)の日記

(利休と付き合いがあった。)

利休のことであるが曲事があり、逐電した。

木像に雪駄を履かせ、その上杖までつかせたとは、いかにも俗人をあしらったものでとても聖なる大徳寺山門に安置するのはふさわしくなく、関白はじめ天皇、名家、諸大名などの歴々の衆が詣でるのに対し、適正を欠いた行為と見ざるを得ない。

⑧ 山科言継(やましなときつぐ)の日記

多くの戦国大名との交流で知られていて、さまざまな情報を入手できたはずなのにこの事件に関し一切書いていない(切腹などなかった?)

⑨ 豊後の大友宗麟の国元への書状

諸侯が居並ぶ前で秀長公が「内々のことは千利休、表向きのことは秀長が承る」と。

この度千利休が気持ちを入れて奔走してくれた様子は言い尽くすことが出来ない。

今もこれからも秀長公と千利休殿へ、慎重に分け隔てなく親しくすることが肝要である。

⑩ 秀吉の実母大政所への書状

事件の翌年(1592年)に九州の名護屋城にいた秀吉が直筆で母親の大政所に宛てた手紙に「利休の茶にて御膳もあがった」と書いている。

当時、利休流の作法というのはまだ確立していなかった。1594年、蟄居を命ぜられていた娘婿の千少庵が秀吉に蟄居を解かれ、京千家を興した。その後千少庵等が利休を始祖として利休流の茶を確立した。(表千家に秀吉の書状が残っている。)

素直に文字通りに'利休を名護屋城に呼んで、利休のお茶をした'と解釈すべきとする専門家(中村修也氏)もいる。利休が九州の細川家に隠遁していたのであれば可能性がある。

⑪ 2月26日の吉田兼見(細川幽斎の従兄弟で京都神社の神主)

利休の木像が大徳寺にある件で、勘気を被り像は聚楽第の橋に晒される。

その件で大徳寺長老が尋問を受けた。

利休の妻と娘が三成に蛇攻めで処刑されたとの噂がある。(事実ではないだろうが、背後に三成がいるはずと思っただろうか?)

その他の記録として

⑫ 細川家の家史

利休の嫡子道安に300石の領地を与えたという記録がある。

(道安の活動拠点は堺だったので、実際は利休の俸禄だった?)

⑬ 表千家「千利休由緒書」(徳川家康年譜作成事業に伴い千家系譜を作成。その付属書)

事件から約60年後の1653年、表千家4代目の千宗佐が紀州徳川家に提出した。その中で、'利休は秀吉に切腹させられた。茶道に殉じた。'と高らかに顕彰した。(千家の名誉回復と豊臣家の政治を批難?)

⑭ 墨海山筆の「利休伝」

(成立年不詳)利休の木像を柱に立て締め付け、利休の首を木像に踏ませている。毎日、見物が群衆をなす

1650年頃より、切腹時の詳細な様子(テレビドラマ等によく見る)が書かれるようになってきたようである。



大徳寺山門

②上記史料の整理

実際に見たと書いているのは新兵衛の木像磔だけである

史料 \ 処罰	木像磔	切腹	首を晒す	斬首	逐電、追放	高野山
北野杜家(29日)	○		○			
多門院(29日)	○	○				○
竹中重人(29日)				○		
鈴木新兵衛(29日)	○見たと書状に				○追放	
伊達成實(?)					○追放 行方不明	
西洞院(25日)					○逐電	
勸修寺晴豊(26日)					○逐電	
吉田兼見(26日)	○					

山科言継は交流が多い人で、多くのことを書き残しているが、本件に関しては何も書き残していない。

・最も多い記録が利休の木像が京の一条戻り橋で磔にされたことである。伊達家の家臣鈴木新兵衛は‘それを見た。京中の噂になった’と手紙に書いている。他の方は自分で見たとは書いていないので、風聞を書いたのかもしれないが、木像磔だけは一致しているのでこれは事実とするべきと思う。

25日、26日の木像磔以外の記録は

- ・逐電した。
- ・追放された

であり、彼らは興味津々だったのに、その後は利休に関して何も書いていない。それ以上の情報が無かったからだと解釈すべきである。

29日の記録は

- ・多門院日記には‘利休が屋敷を売り払い、高野山に登ったという風聞を聞いたが、切腹の噂も聞いた’とある。根拠のない噂だろう。
- ・追放された
- ・秀吉公が処刑した。(竹中重門の著書『豊鑑』)
- ・首を木像とともに一条戻り橋に晒された(2/29の北野杜家日記)

- ・28日の朝、切腹したとの伝聞がある。また高野山に登ったとの風聞もある。(多門院日記)
- ・奈良で盗賊が捕らえられ、京都で晒し首になった(西の洞院日記)
(晒し首は盗賊のもので、同じ場所だったので、利休の首と誤解された可能性がある。)

切腹の噂を聞いた多門院は高野山に登ったとも書いている。いずれも風聞であろう。切腹させられたとか、晒し首にされたのであれば木像以上に京中の噂になるはずである。単なる噂の一つでしかないと思われる。

処罰の理由で一致しているのは‘木像に雪駄を履かせ、その上杖までつけたとは、いかにも俗人をあしらったので、とても聖なる大徳寺山門に安置するのはふさわしくなく、関白はじめ天皇、名家、諸大名などの歴々の衆が詣でるのに対し、適正を欠いた行為と見ざるを得ない。それを知った秀吉の逆鱗に触れた’ことだけである。木像磔刑を見たという鈴木新兵衛は立てかけられた看板に罪科が書かれていたと書き残している。面白き秀吉様のお言葉というのは山門への利休木像設置のことだろう。売僧その他の噂はあったのだろうが。

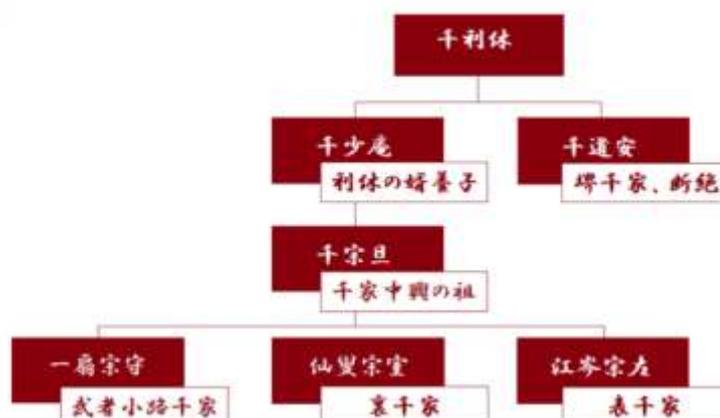
② 当時の史料の検討

- ・25日に木像が磔にされたのは事実。木像設置と売僧が表の理由だが、処刑に値する裏の理由(背景)は分からない。
- ・26日には利休が逐電したとか追放されて行方不明と日記に書いた人はその後、利休に関して記録していない。その後それ以上の確たる情報がなかったと解釈すべきである。
- ・28日の日記に斬首された、切腹の噂を聞いたとかの記録がある。その後は記録していない。それ以上の新たな情報がなかったのだ。

決め手はない。切腹や斬首により処刑された可能性はあるが、裏付ける史料はない。逐電した可能性も残る。その後、何も情報が無かったことは追放・逐電に合致しているといえる。

(2) 『千利休由緒書』(約60年後)と関連する史料

① 千家系譜



②由緒書の抜粋

表千家「千利休由緒書」（徳川家康年譜作成事業に伴い千家系譜を作成。）その付属書の「利休の賜死にいたる過程はいかようなものか」に対する返答を引用する。

この『由緒書』は茶道に関して信憑性が高いとされているようだが、この項目に関しては疑義がある。

下問は、賜死を前提にしているので、徳川家は‘賜死は承知しているが過程がわからない’ということだが、賜死の処罰と知っている徳川家で本当に過程が分からないのだろうか？分からないとすれば、賜死についても分からないのではなからうか？

事件から約 60 年後の 1653 年、表千家 4 代目の千宗佐が紀州徳川家に提出した。

その中で、‘利休は秀吉に切腹させられた。茶道に殉じた。’と高らかに顕彰した。

利休賜死にいたる過程について

○宗旦(利休の孫)の話として

大徳寺山門を再興したことに端を発する咎である。大徳寺山門は、応仁の乱以来、破壊されたまま。これを建て直す人もいなかった。連歌師島田宗長が再興に取り掛かったものの資金不足により門が出来上がったばかり。上の閣(たかどの)を欠いていたため、利休が作事を引き継ぎ、門の上に閣を建てたのである。額を掲げ、己の木像を造らせ閣上に設置させた。像に頭巾を被らせ、尻切雪駄を履かせた。このように天下に傑出し、無双の出世を遂げたため、讒言する輩もある。これらを耳にし、秀吉公は機嫌を損ねたのだろう。

竜宝寺の山門は帝も行幸なされ、院も御行、摂家・清華家の尊貴な方々、みな通られる門である。その門上にわが木造に草履を履かせ据え置くは無礼千万、との咎めによって、天正十八年霜月に利休を勘当。翌十九年正月十三日((2 月 13 日の間違い?) 堺へ追い下され、閉門が命ぜられた。

加賀大納言前田利家卿より内々に

「大政所様、北政所様に助力を仰ぎ、詫びをお入れすれば許されるであろう」と申し入れがある。利休は、

「天下に名の知られたわれらが、命惜しさに女性方に泣きつくなど、無念の極み。たとえ命を落とそうともいたしかたございませぬ」

とお断り申しあげた。

二月二十六日、秀吉の命により帰京。葭屋町の自邸に入る。そうしたところ、利休弟子の諸大名が身柄を奪回せんと噂が立つ。秀吉公は上杉景勝に命じ、侍大将三人、

足軽大将三人に率いられた六組三千人の軍勢により利休屋敷をひしひしと取り固めて両日厳しく警護させたと伝える。

同月二十八日、尼子三郎左衛門、安威摂津守、蒔田淡路守を検使に迎え、利休は切腹して果てた。辞世の頌(しょう)、和歌を別紙に書き留めて宇佐美彦四郎に渡した。

○秀頼公小姓・古田九郎八直談の十市縫殿助(といちぬいどのすけ)物語

天正十七年二月(1589年)、秀吉公は東山近辺へ鷹狩に出掛けられた。黒谷吉門近く、手に鷹を据え徒歩で通る道すがら、畑の中に花見帰りらしい、三十歳ばかりの女房を見かける。乗り物を伴にもたせ、幼児三人連れ、下人男女十人ばかりを従えている。先払いの木下半助が「上様の御成りである。脇へ控えよ」と告げたため、かの花見一行は柳陰にてつくばい控えていた。秀吉公が側を通りながら見てみると、主人とおぼしき女房は器量が類稀なほどすぐれ、年も三十、女盛りの様子。そこで供の小姓を使い遣り、

「何者の妻女であるか」と聞かせると

「千利休娘、万代屋宗安(1594年没のはず)の後家でございます」

と答えた。

聚楽第に戻った秀吉公は、寵愛する尼、幸蔵司(こうぞうす)を呼び、かの女房へと書状を届けさせた。

「聚楽第にご奉公にお出でなさい」

との内意。女房は、

「幼少の子等が大勢居りますので、ご奉公には参れません。どうかお許してください」

と上意には応じなかった。

秀吉公は徳善院(前田玄以)を使いとして、父利休へ「娘を奉公させよ」と命じさせた。

利休は、

「娘をご奉公に差し出したならば、きっと利休めは娘のおかげで出世した、となじられましょう。そのようなことにでもなれば、これまでの佳名もみな水に流れてしまう。思いもよらぬことでございます」

と強く要求をはねつけたのである。秀吉公よりその後三度まで命じられたにもかかわらず、利休は頑として受け入れなかった。そのため秀吉公は、はなはだ利休を怨むようになったのである。

しかしこれしきの事で罰しては、世間の目もいかが、としばし目をつむり、

「利休の罪を待ち、その折誅伐してくれよう」

と思っていた。まさにこうした時、大徳寺山門の件が耳に入り、ついに利休は誅伐されたのである。

以上は、古田九郎八の直談を長曾我部盛親方にて十市縫殿助が聞いたものである。大坂城落城後に、十市縫殿助が語ったところによる。九郎八は古田織部の嫡子の小姓組であった。

③ 秀吉が利休の娘に会ったとする 1589 年前後の経緯

年度	経緯
1585 年	千宋易が天皇より居士号「利休」を賜る
1587 年	北野大茶湯を主管。 聚楽第内に屋敷を構える。 禄 3,000 石を賜る。 大友宗麟が秀吉に謁見した後、秀長に会い‘公のことは自分に、内々のことは利休に’相談するように言われたと書き残している。秀長は利休の最大の後ろ盾であった。すでに絶頂期を迎えていた。
1589 年 2 月	鷹狩に行った秀吉が偶然に利休の娘（万代屋宗安の後家）に会い、見染めた。奉公の内意を出したが、断わられる。
1590 年	この年、秀吉が全国を統一
1590 年 11 月	秀吉が、利休木像を大徳寺山門に設置した咎で利休を勘当
1591 年	この年、秀吉が身分統制令（職業に基づく身分制度）を発布
1591 年 1 月 22 日	秀長死没（1 年くらい前より、病で臥せっていた。）
1591 年 2 月 29 日	秀吉の逆鱗に触れ、蟄居させられ、木像を磔刑処せられて、表舞台から消える。切腹、斬首、逐電等の風聞
1594 年	万代屋宗安死没
1653 年	千宗佐が「千利休由緒書」を徳川家に提出。2 月 28 日に利休が切腹したとある

④ 1591 年 1～2 月の経緯

年度	経緯
1590 年 11 月	大徳寺山門に利休の木像を設置したことが不敬であるとの咎で、秀吉が利休を勘当する。
1591 年 1 月 22 日	利休最大の後ろ盾の豊臣秀頼が死没。（1 年くらい前より、病で臥せっていた。）
2 月 13 日	突然、秀吉の使者がきて、京都から堺の自邸に追いやられ、閉門させられる。（新たな咎は書かれていない）
2 月？日	前田利家が‘大政所や北政所に助力を仰ぐよう’申し出たが、‘天下に名を知られたわれらが、命惜しさに女性方に泣きつくなど出来ない’と申し出を断る。（ここでは賜死の処罰が決まっているとの認識のようだ）
2 月 14 日	この日に作った娘・お亀への和歌が 25 日に宇佐美彦四郎を介

	してお亀に渡る。処罰されるが、賜死については触れていない。
2月14日	細川三斎の家老へ、‘2月13日に見送りしてくれた’ことへの礼状を出す。賜死については触れていない。
2月16日	柴山監物に返礼の手紙を送る。誤解が解けることを期待している。(賜死については触れていない。木像設置に関しての誤解で閉門されていることだろう)
2月25日	<ul style="list-style-type: none"> ・利休の木像が一条戻り橋で磔にされる ・遺偈(ゆいげ、辞世の句)を詠み、宇佐美彦四郎に渡す。(介して娘・‘おふく?’に渡る。回り回って、材木商の手に渡り、およそ200年後に表千家の家元の手に返ったとされる。不自然である。) 遺偈には‘70歳で命を自ら閉じる’ことが書かれている。(この時点で切腹の処罰が下ったことは遺偈に書かれていない)
2月26日	上洛を命じられ、聚楽弟近くの自邸に入る。弟子の諸大名が利休を取り返しに来るとの噂が立ち、3,000人の上杉勢に囲まれたとある。(軍勢が動けば大事である。誰かが記録するはずだが、当時の記録には無い。)
2月28日	検使を迎え、切腹の沙汰があつて、切腹する

④手紙、和歌

○2月14日付けの娘・お亀への和歌

利休めはとかく果報ものぞかし菅丞相になると思えば(無実の罪で太宰府に流された菅原道真こと)

・無実の罪で太宰府流された道真が怨霊となって復讐し、人々から尊敬される果報ものであるとされている。

・道真は無実で太宰府に流されたが、賜死の処罰はされていないので、利休自身は無実だと思っているし、表舞台から消え去ることは覚悟しているが、死まで想定していないと思われるが？賜死の処罰を受けて娘に渡す辞世の和歌なら、手紙を付けて、経緯を書くのではなからうか？

追放されることは決まっていて、賜死を偽装するためとしたので、何も詳細は書けなかった？うがち過ぎか？

・賜死と分かった時点でお亀に和歌以外に別れを告げる手紙を出してもよいはずだが、出していない。逆に考えると賜死の処罰がなかったとしたら、それなりに辻褃が合う。

○2月14日細川三斎の家老への手紙

飛札をくれた細川三斎の家老・松井佐渡守へ返礼を兼ね書き遣わした書状である。

13日夜、にわか聚楽第の屋敷を後にした。淀の船着場まで下った時に、見

送りに来てれた 2 名に気づく。細川三斎と古田織部であった。二人の姿を見て自分の真の理解者たちへの心からの感激の情を述べたもの。別れを示すような片鱗は見られない。

○2月16日柴山監物への手紙

御詠（監物の手紙にそえてあった彼の歌）にまた一入（ひとしお）涙ばかりに候 返し おもひやみやこをいでて今夜しも淀のわたりの月の船路を返々（かえすがえす）御詠ながめ 返ししかね候まま 御使を待せ申候 いつもと申候ながら今夜又 都の名残かたがたに候 都を出ての淀の川舟とよみ候を 思ひいだすにも涙に候 やがてやがて待申候待申候 ことさらに天気も能成（よくなり）候 かなしく候かなしく候 かしく今は悲しくて涙していますが、悪い天気もやがてよくなりましょう。秀吉の誤解が解けて許されることを期待している？

⑤ 『由緒書』関連の検討

まず『由緒書』を書いた時点では、利休の手紙の存在を知らなかったのだろう。

・利休の娘の話『千利休由緒書』に初めて出てきた。秀吉が見染めたという時期の娘は30歳過ぎで3人の子持ちの後家だ。

他にもっと若くて美しい女性を思うがままにいくらでもはべらせることができたはずだ。

それに利休の木像から判断すると‘娘が秀吉の心を奪うほどにその器量が類稀だった’とは眉唾であり、いくら何でも信じがたい。

・調べてみると万代屋宗安は確かに利休の娘婿となっているが、1954年死没となっていて、‘宗安は利休の助命を企画したとか、利休の孫の宗旦の庇護をした’となっている。利休の娘が秀吉に会ったのは1589年ごろであり、後家ではなかったことになる。創作が疑われる。木像設置だけでは切腹に値する理由にならないので、裏づけのつもりだった？



表千家で保管されている「磔刑にされた木像」
(本人が監修している)

この話を宗旦が秀頼の小姓から聞いたというが、その小姓が知っていたことを当時の人やその後の人たちの誰も知らないということはありません。耳をそばだてていた人たちが見聞きすれば、当然日記等に残したはずだ。

・利休が「娘を差し出して出世したと思われたくない」とした理由もあり得ない。すでにその2年前には政権 No. 3 に登りつめていたので、そのときは絶頂の極みだった。

・「由緒書」によれば、木像設置の咎で、1590年11月に勘当されている。1月13日に京都から堺に追放され、閉門にされたとなっているが、これは2月13日の間違いだろう。それなら和歌や手紙の内容と一致する。新たな咎は書かれていない。

・その後、前田利家が「大政所や北政所に助命の嘆願」をするよう利休に申し入れたが、それに対して、たとえ命惜しさに女方に懇願はしないと断っている。ただし、賜死の処罰の通知を受けたことは書かれていない。

2月14日付けの娘・お亀への和歌は自分を菅原道真になぞらえているので、無実の罪で表舞台から去り、地方に左遷か追放かと考えていたとも思える。賜死の処分とまでは思っていなかったのであろう？「怨霊となって復讐でき、人々に尊敬される」ことを果報ものと表現しているのだろうが、果たしてそれだけだろうか。

・25日、木像磔でも咎は変わっていない。(売僧は市中の噂？)

・26日に、上京を命ぜられ、京の屋敷に入るが、上杉勢3,000の兵に屋敷を囲まれたとあるが、京中の噂になったはずだ。しかし誰も書いていない。そのようなことが無かったからだろう。

・28日は切腹したことは書いているが、新たな咎は書いていない。結局咎は木像設置だけといえる。

・賜死と分かった時点でお亀に別れを告げる手紙を出してもよいはずだが、出していない。逆に考えると賜死の処罰がなかったとしたら、それなりに辻褃が合う。

・晒された木像は現存して千家で保存されている。屋敷はすぐに取り壊されたので、磔にされた木像は当然処分されているはずである。切腹ならなおさら処分されているはずだ。千家に残されているのは本当に不思議だ。

切腹説にしたので、それを納得させられる理由を創作せざるを得なかったのであろうが、結局は陳腐な話になってしまった。全体に信頼性が薄い。切腹そ

のものが疑われる。いずれにしても政治の表舞台からは消え去らなくてはならなかったのは間違いがない。当時、最も噂の多かった追放や逐電説が妥当だ。

隠遁したとの証拠はないが、切腹したという証拠もない。

恐らく、70歳で老い先短い人生をどこかで密かに過ごしたのだろう。

隠遁先は細川藩説がある。利休も状況を理解し、政治の表舞台から消え去る方法の選択肢の一つとして隠遁を選択せざるを得なかったのだろう。隆盛を誇った千家の子孫としては利休が逃げ隠れしたということは不名誉なことであろう。

このことはごく一部のみにしか知らないことであり、知っている人も知らないふりをした。説明が一切ないまま逐電したので人々は憶測によりさまざまな風聞を流した。本当に斬首や切腹であれば、おいおい真相を確かめられたはずだ。恐らく晒し首は盗賊のもので、場所と日にちが重なっていたので、その首を見て‘利休の首’と勘違いした人がいたのかもしれない。事実であれば興味津々の多くの人たちが書き残していたはずだ。

○処罰された理由の一覧表（逸話は除く）

当時の記録、それから約60年後の『千利休由緒書』、その後の記録（創作や憶測が主？）

史料や諸説	当時の記録	由緒書	後世の新たな説
処罰の理由			
木像に雪駄を履かせ、その上杖までつかせたとはいかにも俗人をあしらったので、とても聖なる大徳寺山門に安置するのはふさわしくなく、関白はじめ天皇、名家、諸大名などの歴々の衆が詣でるのに対し、適正を欠いた行為と見ざるを得ない。それを知った秀吉の逆鱗に触れた	○	○	
加賀大納言前田利家卿より内々に「大政所様、北政所様に助力を仰ぎ、詫びをお入れすれば許されるであろう」と申し入れがある。利休は「天下に名の知られたわれらが、命惜しさに女性方に泣きつくなど、無念の極み。たとえ命を落とそうともいたしかたございませぬ」とお断り申しあげた。		○	
利休弟子の諸大名が身柄を奪回せんとの噂が立つ。秀吉公は上杉景勝に命じ、侍大将三人、足軽大将三人に率いられた六組三千人の軍勢により利休屋敷をひしひしと取り固めて両日厳しく警護させたと伝える。 同月二十八日、尼子三郎左衛門、安威摂津守、蒔		○	

田淡路守を検使に迎え、利休は切腹して果てた。辞世の頌（しょう）、和歌を別紙に書き留めて宇佐美彦四郎に渡した。			
新たな茶道具を法外な値で売り払って利益を上げている。売僧（まいす、僧形で物品の販売などした墮落僧）の極みである。	○		
二条天皇陵の石を勝手に持ち出し手水鉢や庭石などに使ったことが秀吉の怒りを買った			○
秀吉と茶道に対する考え方で対立した			○
秀吉はもともと茶が嫌いで、ある日彼の命令で黄金の茶室で「大名茶」と呼ばれる茶を点てたところから利休は密かに不満を募らせていた（黄金の茶室は利休の設計なのであり得ない）			○
その後、利休が信楽焼の茶碗を作っていることを聞いて憤慨した秀吉はその茶碗を処分するよう利休に命じたが、利休が全く聞く耳を持たなかったために逆鱗に触れた			○
秀吉が利休の娘を妾にと望んだが、「娘のおかげで出世していると思われたくない」と拒否し、秀吉に恨まれた		○	
豊臣秀長死後の豊臣政権内の不安定さからくる政治闘争に巻き込まれた。台頭してくる石田三成等若手との対立			○
秀吉の朝鮮出兵を批判した			○
権力者である秀吉と芸術家である利休との対決の結果			○
交易を独占しようとした秀吉に対し、堺の權益を守ろうとしたために疎まれた			○
利休が修行していた南宋寺は徳川家康とつながりがあり、家康の間者として茶湯に毒をいれ、茶室で秀吉を暗殺しようとした			○
秀長没後、政権内での台頭してきた石田三成等の五奉行との軋轢			○
茶道は武士も町人も皆平等の精神で、秀吉もその考えだったが、士農工商の身分制度を確立するために考え方が変わり、多くの諸大名を茶道の弟子とする利休の存在が邪魔になった。そして対立をうみ、排除した			○

後世に書かれた理由は新たな史料が出てきていないが、謎が多いのでさまざま憶測をしたものと思われる。

政権 No.3 とも言われ、政治的なフィクサーだった利休が政権に台頭してきた石田三成等の官僚に煙たがれた。また、秀吉の朝鮮出兵に苦言を呈したかどうか確証はないが、とにかく秀吉に煙たがられ、政権から遠ざけられてしまったことは確かだろう。が、しかし切腹させられるような罪とは到底思えない。それに切腹は武士の名誉ある死である。例え賜死を与えるにしても町人の利休を武士の扱いで名誉ある切腹を与えるだろうか？前代未聞であり、後世でも町人の切腹はあつたらうか？江戸時代に茶人・古田織部が切腹させられているが、れっきとした武士である。

余命いくばくかの70歳の老人である。当時噂になったように、(因果含めて)隠遁させて表舞台から外すだけで十分である。

(3) 遺偈 (ゆいげ、辞世の句)

2月25日に書いたとされる利休の遺偈 (ゆいげ、辞世の句)

遺偈とは死の直前に最後の心境を吐露し、後進に伝える句である。

利休が閉門という監禁刑を受けていた。この句はいくつかの書として残して、垣根越しに人(宇佐美彦四郎)に渡した。2月25日と言われている。その内の1枚を娘である「おふく」に渡した。そしていつの代かに紛失し、回り回って冬木家という関東の材木座にあった材木商にわたった。材木商は紀州の山持ちで、表千家を盛り上げた川上不自が冬木家に赴き譲り受け、家元に返したとされる。今も家元に残っている。(引用)

① 遺偈の抜粋と意識の例(引用)

人生七十 力困希响 (じんせいしちじゅう りきいきとつ)
吾這寶劍 祖佛共殺 (わがこのほうけん そぶつともにくろす)
提る我得具足の一太刀 (ひっさぐるわがえぐそくにひとたち)
今此時ぞ天に抛 (いまこのときぞてんになげうつ)

意識の例(あまりにも難しいが)

人生70年。これで悲喜こもごも様々なことがあったが、これで終わり。
私が持つ宝剣を使い、祖仏とともに私もその生涯を終える。
上手に使いこなせるこの武器をもって、みずからに一太刀を浴びせる。
そして自らの命を天に放とうではないか。

遺偈は後進に何かを伝えものですが、これは何を後進に伝えようとしているのか真意をつかみることができません。

伝えようとした後進は誰かということだが、お亀の息子・宗旦だろうと憶測する人もいる。それなら遺偈を少庵かお亀に渡すはずだし、後進を宗旦と特定しなくても、少庵か道安に渡すのが妥当である。遺偈を渡したとされる‘おふく’

が特定できないが、これは当然渡されてもよいはずのお亀等が遺偈を一切承知していなかったことを表している。由緒書を作成した千宗佐も見えていないのではないかと疑ってしまう。存在しなかったかもしれないと思われる。それに遺偈が回り回って他人の手に渡り、約 200 年後になって川上不自 (1719~1807 年) が見つけるというのは不自然である。正当な遺偈なら最初からお亀、少庵、宗旦等のルートに渡すだろうし、決して他人の手に渡ることはないと思われる。

14 日付け和歌をお亀に渡しているので、遺偈を渡すとしたら、やはり少庵に嫁いだお亀に渡すのが妥当と思われる。それにこのような難解な辞世の句だけでなく、別れを認めた手紙にして、それに句の扱ひも記述して渡すのが自然と感じる。利休の後進は千道安であり、千少庵である。4 年後、千道安が堺千家を、千少庵が京千家を立ち上げているのだ。孫の宗旦に向けての遺偈と憶測する方もいる。その場合でもお亀か少庵に渡すはずである。娘‘おふく’というのは分からないがお亀ではない。不自然である。

それに、遺偈の経緯とか、中身に少しは触れてもよさそうだが、『千利休由緒書』に書いていない。かえって切腹の証明にならないと思ったか？

千宗旦が『千利休由緒書』に遺偈のことを書いているので、その時は和歌同様に表千家にあり、千宗佐が見たうえで書いているだろうから、それなら祖母のお亀に渡っていたことになるのだろう。それにしても千家流茶道の始祖であり、茶聖とされた利休の遺偈が紛失するだろうか？

真筆と認められていても、‘切腹を演出し、逐電をカモフラージュするため’との疑念が拭い去らないような気がする？

真筆でなければ、後世に切腹の辻褃合わせのためにでっち上げたことになる。この句を以て、70 歳で死没した根拠とするのには疑問が残る。

利休の子供の一覧

母親の名前 子供	先妻・お稲 (宝心妙樹)	後妻・おりき (宗恩)	お幹 (妾)
長男・道安	○堺千家		
長女・おゆう	○茶人・千紹二 (利休の弟の子) の妻		
次女・お袖	○万代屋宗安 (もずやそうあん) の妻		
三女・お吟	○茶人・石橋良叱の妻		

四女・おこう	○僧侶・円乗坊 宗円の妻		
五女・？			
六女・お亀（お ちょうとも）			○小庵の妻
少庵		○宗恩の連れ 子、京千家を創 設 二人の子の宗旦 が千家の中興の 祖	
田中宗慶（陶 芸）			○

（４）テレビ番組「にっぽん！歴史鑑定」の『千利休はなぜ秀吉に切腹・・・』より

テレビ番組「にっぽん！歴史鑑定『千利休はなぜ秀吉に切腹・・・』を見たことがある。小和田哲男先生の監修だ。先生は番組の中で「利休の木像を大徳寺の山門に設置したことが不敬なことなので木像を磔にして、利休を懲らしめようと思ったが、利休が詫びに来なかったので極刑の切腹刑にしたというのは口実で、最初から秀吉は賜死の処罰するつもりだったと思う。資料はないけれども、本来は斬首刑だが、大政所や北政所等のとりなしで名誉ある切腹になったと思う。台頭してくる石田三成等との確執や他の理由はあるにせよ、真の理由は 2 畳の茶室の中では公家も武士も町民も皆平等とする利休の茶湯の精神が秀吉にとって邪魔になってきたことによると思う。1857 年、「北野大茶湯」大茶会を催したころは秀吉も「茶湯はだれにでも平等」と思っていたが、その後社会制度・士農工商の身分制度を確立することになり秀吉が変わって来た。多くの諸大名や武将を弟子とする町人の利休の存在が邪魔になってきて政権から排除する必要が出てきたからだと思う。」と。

「利休を政権から排除する理由としては納得できるが、排除の方法が即磔刑とか切腹になってしまうのか？それなら当時の史料に斬首か切腹で死去したという記録があるはずである。ないのは何故か？木像磔の記録は複数残っているのに」と疑問が湧いた。

番組では、切腹説は千宗佐の『千利休由緒書』と同じだが、その処罰の理由は『千利休由緒書』とは異なっていた。当時の史料についての見解に触れなかったと記憶する。もし、子孫の隆盛がなければ『千利休由緒書』も書かれなか

ただろうし、その場合、当時の史料だけで検討したはずだ。それにしても無視してしまうのは問題だと思う。

後ろ盾が必要だった利休は高価（に釣り上げたと言われた）な茶器の売買で儲けた金品を秀長に献じることにより、秀長の後ろ盾を得て政權NO.3の座に登りつめることができたとの説がある。

1587年、秀吉が北野大茶湯を催し、利休が主管した。公家、武士や町人も平等に招き入れた。茶の湯の好みの違い茶器を作って売り出す。わびさびの世界、にじり口はわずか60センチ四方。這いつくばって中に入り、そこではわびさびの世界で人は皆平等である。わずか2畳の空間では膝と膝を突き合わせるほどになり、各段に大柄な利休に圧迫されてしまうことになる。（これも利休の計算尽くで、その曲者ぶりを発揮していると思われる。）

この空間では諸大名だけでなく、ときには秀吉も圧迫を感じたかもしれない。

小和田先生はテレビ番組で「史料は無いが、木像の件は口実だけで詫言を入れても処罰は変わらなかっただろうし、朝鮮出兵に反対したとか、利休の絶大な擁護者の秀長死没後、石田三成等五奉行に疎まれて秀吉に排除を働きかけられたことも要因としてあろうが、処罰の真の理由は秀吉が新しい社会制度、身分制度を確立するために、‘公家、武士や町人も皆、平等とする利休の茶湯の精神が邪魔になって来た。本来は磔刑だが、恐らく北政所等のとりなしで、名誉を重んじた切腹になったのではないかと思う。」と。

そのときの映像は‘屋敷は3,000もの兵に囲まれて、検使を迎えて切腹し、内臓をつかんだ後、合図をして検使に介錯してもらった。首は一条戻り橋で木像に踏みつけられた状態で晒される’シーンである。映画やドラマ等でよく見るシーンだ。

内臓をつかみだしたとか首を晒されたシーンは『千利休由緒書』にも書かれていないが、まるで史実としているような映像だ。

政治の舞台から利休を排除する理由としてはすごく納得できるが、排除することが即磔刑や切腹刑に繋がるというのは納得し難い。秀吉がそんなに残虐か、『千利休由緒書』に書かれていることが、当時でも人々が知ることができたのに誰も書いていない。後世の創作が疑わしくなる。

史料に状況をどのように読み解いているのか、そして検証については触れなかったもので物足りなかった。

2-3. まとめに入る

(1) 前提条件を整理する

利休は茶人として名声を得て、利休流茶道の始祖である。のちに茶聖と崇められた。基礎となる事績を築いたが、子孫が利休流と言われる茶道を確立していたものであり、千家が隆盛したのは子孫の努力の賜物である。茶道に専念し

た茶の湯の求道者となるのは子孫からであり、利休は商人であり、政治家であつての茶人なのだ。現在の千家の茶道の姿を念頭において、利休がお茶のために他を犠牲にしてしまう孤高の求道者と捕らえて、その末期の真相を探ろうとする的を外して見えてこないかもしれない。

利休はまず、堺の商人であり、納屋衆（倉庫業）のネットワークで得た情報を活用して、茶室と茶道を政治の道具にしたことで信長に登用され、積極的に近づいて戦争道具の鉄砲などで商いをし、参謀として政治にも積極的にかかわっていた。信長亡き後、秀吉は利休の情報量を政治に利用し、茶室政治を推進し利休を利用してきた。

利休は秀吉や秀長の権威を後ろ盾として、商売するだけでなく、政治の世界に積極的にのめり込んでいき、政権 No3 とされるまでになった。根からの政治好きなのだ。歴史上の 3 大ペテン師の一人呼ばわりする方もいるが、この三人の中で一番の曲者のように思われる。柔軟な対応ができる人物なのだろう。

① 処罰の理由を整理（後世のものも含む）

- ・大徳寺山門に設置した利休の木像の下を秀吉にくぐらせた。
- ・茶道に対する考え方で対立
- ・安価の茶器類を高額で売り、私腹を肥やした売僧の疑い
- ・二条天皇陵の石を勝手に持ち出し手水鉢や庭石に使った
- ・秀吉が利休の娘を妾に望んだが、拒否された
- ・秀吉の朝鮮出兵を批判した
- ・権力者である秀吉と芸術家である利休の自負心の対立
- ・秀吉死後の政権内の不安定さからくる政治闘争に巻き込まれた
- ・交易を独占しようとした秀吉に対し、堺の権益を守ろうとしたため疎まれた。
- ・利休が修行していた南宗寺は徳川家康とつながりがあり、家康の間者として茶湯のなかに毒を入れ、茶室で秀吉を暗殺しようとした
- ・秀吉が身分制度を確立していくのに、多くの諸大名を弟子にしている利休が邪魔になって来た。
- ・多くの諸大名を弟子にしている利休の脅威

② 検討

利休は‘利休流茶道の始祖’であり、数々の事績は評価されるべきで、当然、後世に名を残すべき人物である。しかし、千家茶道は子孫の努力により隆盛した。子孫は茶道に特化した求道者として尊敬された。利休の人物像はそれにより加味され、孤高の求道者に作り上げられたきらいがある。それを前提にしてしまうと、利休の最後を見間違ってしまう恐れがある。

従い、このことを見据えて、利休がどのような最後を迎えたのか、そしてその要因は何だったのかを検討しなければならないと思う。

❶ 利休が侘茶の世界を追求し、茶道を高めていったが、茶道のためには信念を曲げないとか一切妥協しない孤高の求道者とすべきではない。

❷ 秀吉の処罰の対象は何か？そしてそれにふさわしい処罰は？

当時の状況を考慮して絞り込む。

利休が勘当された時点や蟄居された時点で咎を明確に認識していないと思われる。

・茶道に関する対立か？

利休の‘茶の湯’は多くの政治、経済界の有力者知己を得て、‘道’にまで高まって行き、‘茶道’として、簡素な芸術性を求めて詫び茶の方向に変わっていった。

一方、政治の道具として、権力の象徴として’茶の湯‘を使い続ける秀吉との距離は開いて行ったとされる。これは咎の表の理由にも裏の理由にもならない。

・身分制度の士農工商を推進する秀吉は、町人ながら諸大名や諸武将を弟子している利休が邪魔になってきた。

❸ お茶のためには他のことを全て犠牲にし、場合により命も惜しまない性格か？

後世、利休を「茶道をとことん求道した聖人扱いして、茶道に関しては妥協も許さず、命も顧みないと人」とするのはいかなものだろうか？利休はわびさびの世界とは真反対に思える秀吉の黄金の茶室の設計にも絡んでいて、秀吉の茶道にも妥協している。決して茶道に関し妥協を許さない孤高の人ではなく、状況に応じて柔軟に対応できる人格のようである。

❹ 名誉やお金に執着しないか？茶道さえ深めることができれば他はなくても満足できる求道者だったか？

お金にも執着し、安く買った茶道具を高く売っている。高くても買う人がいるからで、利休の問題だけでは無かろう。

お金も、自分の命も大事（執着）にするタイプのものである。

❺ 政治への関与

利休は秀吉の参謀として、町民の身ながら好んで政治に関与して、政権のNo. 3まで上り詰めた。

茶道の求道者で且つ政権のフィクサーである。台頭してくる石田三成等五奉行等が利休の口出しに辟易し、社会制度の見直しを進める上に利休の存在が邪魔になってきた。社会制度・身分制度の確立を必要とした秀吉自身も利休の存在がだんだん疎ましくなり、邪魔になってきたので表舞台から

消え去ってほしくなった。しかし、政治への関与を許してきたのは秀吉であり、何も変わっていない利休を表舞台から外すために厳罰に処するのは難しく、対策を苦慮した？

⑥ 勘当された時点、蟄居を申し渡された時点で、利休自身が咎を世認識していない可能性がある？木像設置と茶器の売僧問題も木像磔の時に初めて認識した？

③ 史料と処罰のまとめ

処罰の種類 史料の種類	追放、逐電	斬首	切腹
当時の史料 2月25日、26日	<ul style="list-style-type: none"> ・西洞院 ・勸修寺晴豊 吉田兼見は木像磔を書いたが、それ以上は記述せず。		
同上2月29日	<ul style="list-style-type: none"> ・鈴木新兵衛 木像磔を見ているので、その後も注目していたはずだが、28日のことに関しては触れていない。その後も書いていない。 <ul style="list-style-type: none"> ・伊達成實 ただし、書いた日が不明 木像磔以降、格別の情報もなく、表舞台から消え去った状況に合致している。	<ul style="list-style-type: none"> ・北野杜家 ・竹中重門 	<ul style="list-style-type: none"> ・多門院 高野山に登ったとも聞いたとも書いている。 明確に切腹と書いた人はいない。
千利休由緒書			<ul style="list-style-type: none"> ・咎は1590年11月に勘当されたときの「山門に木像設置した」ことだけ

			<p>で、その後も新たに書かれていない。これだけと解釈する。</p> <ul style="list-style-type: none">・表の咎以外に処罰の裏には娘の奉公拒絶の恨みがあるというのは切腹に値する理由とは思えない。疑義があり、創作が疑える。・3,000 の兵に囲まれた話は当時の誰もが日記類に残していない。・娘婿の万代屋宗安は後の 1594 年死没である。娘は後家というのと矛盾している。・秀吉がこだわるほどの美形というのも利休の木像からは疑問がある。突然変異？・60 年後に初めて出てきた話でそれまで噂も無かった。・遺偈が千家に渡った経緯、いつの日かに紛失し、約 200 年後に回り回って出てきたというのは疑問がある。これらの疑義で、創作の疑いがあり、切腹そのものも創作の疑い出てくる。・少なくとも千宗
--	--	--	---

			佐は遺偈を見たはずなので、その時点までは千家にあったはずである。それなら世間の誰もが知らないはずはなかろう。
『由緒書』の中の、 「2月13日の蟄居の沙汰があったときに、処罰が申し渡されたと思われ、その直後、前田利家が太政所や北政所に助命嘆願をするように申し出たが、拒絶した。」(創作が疑われる)		処罰が賜死と決定し、利休がそれを認識していたと分かるが、同時期の利休が作成した和歌や手紙とは違和感がある。	→
細川三斎への礼状	賜死について触れていない。追放の罰であれば合致している。	賜死の処罰が決まっているなら、話せる間柄であり、触れていない。違和感がある。	→
柴山監物への手紙	賜死について触れていないし、不幸を悲しんでいるが、誤解が解ける日を期待している。追放なら合致している。	賜死の処罰なら、違和感がある。	→
遺偈(ゆいげ、辞世の句) 「千利休由緒書」に明記している。	真筆であれば、追放を隠すために偽装した可能性があるが、罰が追放だったので、その時点では無かったのだろう。無かった		遺偈が千家に渡った経緯、いつの日か、紛失し、約200年後に回り回って出てきたというのは疑問がある。 遺偈を以て、切

	<p>としても辻褃が合う。娘への和歌が、世間と家族への別れであったかもしれない。</p>		<p>腹して 70 歳で果てた証拠とする文献は見ることがない。</p>
--	--	--	-------------------------------------

(2) まとめ

処罰の真の理由は、利休本人も分からないのだろう。後世の人も賜死に値する咎は分からない。政治絡みの理由は政権側の都合であり、利休の所為ではないので、申し渡すことではない。

後世、『千利休由緒書』に初めて切腹が明記されたが、内容に疑義があり、創作された臭いがする。切腹だけは本当だと言われても、簡単には肯けない。

当時の史料に切腹を示す記録がない。

このときの政治状況から、政権の場に従来通りに利休の存在を許す状況にはなかった。利休に政治の表舞台から去ってもらいたいのは間違いなかろう。死罪にしてこの世から消えてもらうか、それとも、追放して家族や世間と絶縁させるかになる。政治に関して利休の咎は無いので、せいぜい、木像設置でケチをつけて、木像を磔にして、因果を含めて追放するくらいが関の山だろう。

切腹とかの厳罰に処すとは到底思えない。後年、極悪非道になっていた秀吉だから極刑にしたという説があるが、それなら木像磔などの余計なことはしないだろう。むしろ木像磔で懲らしめることこそ秀吉らしい一面をのぞかせているのではなかろうか。

恐らく 70 歳で老い先短い人生をどこかで密かに過ごしたのだろう。隠遁先は細川藩説がある。

本当に斬首や切腹であれば、政権中枢も一般大衆もおいおい真相を確かめられたはずだ。

晒し首が橋の上にあったとして、それは盗賊のもので、場所と日にちが重なっていたので、その首を見て‘利休の首’と勘違いした人がいたのかもしれない。

因み、利休の一番弟子・山上宗二は商人であるが、秀吉の怒りを買って斬首された。利休がこれを怨みがあり、仲たがいの一因になったという説があるが、山上宗二の暴言や態度にある程度の原因があるので、利休がしこりを残すほどではないと思う。これをもって秀吉の残虐さを強調し、残虐な秀吉が同じように利休も切腹させたというのも頷けない。

以上

3. 政宗は弟を殺していなかった？

3-1. 前書き

独眼竜といわれた伊達政宗は遅れてきた英雄で、戦国時代一番の英雄だと思っている。戦国時代の他の英雄より生まれてくるのが、少し遅かったことと生まれた場所が近畿から遠過ぎたというのが不運だった。あと10年、20年生まれるのが早ければ天下人になっていただろうと言われている。



支倉常長像 (アルキータ・リッチ作)

人並優れた戦略、支倉常長の遣欧使節団のように並外れた政略、『馬上少年過ぐ』にみられるような漢詩の才能に加え、和歌、能の素養もあったといわれている。小田原参陣(注.1)で見せた、謝罪と処世術の天才であり、わくわくするような生き様に強く魅かれる。

注記.1 小田原参陣

小田原参陣

政宗は再三の小田原出陣を秀吉に要請されるがなかなか応じない。やっと遅れて参陣するが、箱根の山に幽閉される。処刑を覚悟した政宗は死に装束を着用して秀吉や諸将の前にあらわれ、秀吉や諸将は驚く。死に値する過失であったと自ら認め、肝の据わった派手なパフォーマンスで難を脱する。

最も好きな英雄であるが、政宗の弟殺しにまつわる暗い話は納得がいかなかった。信長の弟殺しはさもありなんと�えるが、政宗の弟殺しは政宗の生き様に似合わない。やはり政宗母子がお家のために仕組んだ狂言だったのであろう。納得である。

漢詩『馬上少年過ぐ』

馬上少年過	馬上少年過ぐ
世平白髪多	世平らかにして白髪多し
残軀天所赦	残軀天の赦す所
不楽是如何	楽しまずして是を如何にせん

現代語訳

戦場に馬を馳せた青春の日々は遠く過ぎ去った。
今や天下は太平。俺の髪の毛はすっかり白くなった。

生き残ったこの身の処し方くらい、どうしようと天は許してくれる。
楽しまないでどうするというのがだ。

新史料に基づき専門家には歴史を書き直してもらいたい。

これらは司馬遼太郎の著書『馬上少年過ぐ』に詳しく書いている。

3-2. 伊達政宗毒殺未遂事件

以下、引用する。

伊達家の正史『貞山公治家記録』によれば、

事件が起きたのは 1590 年 4 月。政宗が秀吉に謁見するために小田原へ参陣する直前に起きた。黒川城で母の陣立ちの祝いの席に招かれた政宗は、母・義姫の用意したお膳に箸をつけたところ、たちまち腹痛をおこす。急ぎ館に戻り投薬を受け、危うく一命をとりとめた。母が自分を毒殺しようとしたことにショックをうけた政宗は、母が溺愛する弟の小次郎に伊達家を継がせるために自分を殺そうとしたこと、その背後に母の実家最上家の陰謀があることを感じとり、4 月 7 日みずから弟の屋敷に赴き小次郎を手討ちにする。不憫だが、母を殺すわけにはいかない、というのが理由だった。義姫はその晩、山形の最上家に逃げ帰った。

『貞山公治家記録』は信憑性が高い歴史書であり、これが定説となった。しかし、政宗が死んでから約 70 年後の元禄 16 年(1703 年)に編纂されたもので、政宗などの手紙などと照らし合わせると、矛盾する点が見つかった。

1 つは、毒殺未遂事件の後も、政宗と義姫が手紙のやり取りをしていることである。

事件後に政宗から義姫にあてた手紙は 7 通が知られているが、実家に帰った母に、政宗に手紙を送ることは可能だったのだろうか。最上家が拒否しなかったのだろうか。

もう一つは、いずれの手紙も親子の情愛が伝わってくる。非常にいい内容だということだ。例えば、朝鮮出兵中に義姫に当てた手紙には、母から贈られた小遣いに対する感謝とともに、「ぜひ無事に日本に戻って、もう一度お会いしたい」と記されている。

「嫡男を毒殺しようとした母」と「母が愛する弟を手にかけてた嫡男」なのに、手紙からはわだかまりの気配が感じられないのである。

3-3. 政宗の弟殺し

私は長らく疑問に思っていたが、今から 23 年前、これを解く鍵となる史料が発見された。それは、政宗の師である虎哉和尚が、文禄 3 年(1594 年)11 月 27 日に、京都にいた政宗の大叔父・大有和尚にあてた手紙である。

そこには、「政宗の母堂が今月 4 日夜、最上に向かって出奔した」とある。

政宗は天正 19 年(1591 年)9 月に米沢から国替えされ、当時は岩出山が居城であった。つまり義姫は、会津黒川城～ではなく、その 4 年後に、岩出山から実家の山形に向かって出奔したことになる。

義姫が政宗と一緒に岩出山に移っていたのなら、その間、手紙のやり取りしていたことは当然可能で、一つ目の矛盾は解決さる。

だが、2 人が何ごともしなかったように一緒に暮らし、手紙をやりとりしていたことについては、まだ疑問が残る。

ともあれ、『治家記録』にも誤りのあることがわかり、事件を見直す必要が出てきたのである。そして驚くべき背景が見えてきた。

東京都あきる野市に、大悲願寺という寺があり、注目すべき記録が残されている。寺の 15 代住職の秀雄が、政宗の弟だというのである。



あきる野市にある大悲願寺

大悲願寺には、元和 8 年(1622 年)8 月 21 日、当時の住職である 13 代目・海誉上人にあてた、政宗の手紙が伝わっている。

内容は、大悲願寺を訪れた政宗が庭に咲いた白萩の美しさに心奪われ、江戸に帰ってから株分けを所望したものである。

この手紙の包み紙の裏側には、「実は大悲願寺の 15 代目住職の秀雄は、伊達輝宗の末子で、伊達政宗の弟である」と記されている。

これを書いたのは、江戸時代中期の住職・如環とされ、彼は大悲願寺の過去帳(『福生市史資料編中世寺社』に全文翻刻されている)も整理している。そしてその過去帳に、如環が秀雄を政宗の弟とした根拠があった。

秀雄が 15 代目住職を務めていた寛永 13 年(1636 年)5 月 24 日の条に、政宗が没した時に秀雄がその回向(供養)を行ったことを示す、次の記述がある。

「奥州住、伊達陸奥守権中納言従三位・藤原政宗、左京太夫・輝宗乃嫡子、沙門秀雄兄、寛永十三丙子五月廿四日薨、七十歳也」

亡くなった時の政宗の官位、藤原という伊達氏の本姓、左京太夫・輝宗の嫡子という記述は正確であり、「沙門秀雄兄」、すなわち「私の兄」で、だから供養したというのだ。

過去帳は言うまでもなく住職が書くものであり、つまり秀雄自身が「政宗は自分の兄」と記したことになる。

また過去帳には、秀雄が没した寛永 19 年(1642 年)7 月 26 日の条に、「秀雄輝宗の二男で、政宗の弟」とある。

政宗の弟は小次郎ただ一人ある。それ以外の弟は、系図上一切出てこない。

すると、御落胤という可能性もないと言い切れないが、秀雄＝小次郎という可能性が出てくる。

実は他にも、小次郎生存の可能性を示す記録がある。

『治家記録』を編纂する際、史料として使われたのが、当時の伊達家の日記『伊達天正日記』だ。

原本を見ると、政宗が小次郎を手討ちにしたとされる天正 18 年 4 月 7 日の部分が、何行分か切りとられていて、残された部分には、政宗が小次郎の傳役だった小原縫殿助を、自分の屋敷に呼んで手討ちにしたとある。つまり、小次郎を殺害したという記述はどこにも出てこないのだ。

他にも、小原縫殿助は実は生きていて、小次郎を埋葬したという言い伝えもある。小次郎と小原縫殿助の墓は、宮城県登米市津山町横山にある。この墓を管理している曹洞宗の長谷寺の記録と『津山町史』によると、はじめ小原は小次郎の遺骸を福島のある寺に埋葬した。

そして、旧葛西・大崎領が政宗に与えられると、小原は小次郎の遺骸をこの地に改葬し、その後、追い腹を切って死んだとある。墓のある横山は義姫が政宗から与えられた化粧領で、改葬は義姫の内命によるものだという。

二人とも政宗によって手討ちにされたという『治家記録』と矛盾する。

3-4. まとめ

母子で仕組んだ狂言だった！？

結論から言えば、毒殺未遂事件と小次郎殺害は、政宗と義姫との間で共謀された狂言では無かったか。

というのも、小田原参陣の時、政宗に実子はいなかった。すると政宗に万一のことがあれば、伊達家の血統を継ぐ者は小次郎だけである。それを殺すのは考えにくい。

だが、小次郎を当主に推す勢力はあったのだろう。小田原参陣前に、政宗が伊達家の一本化を図るため、弟を排除する必要があった。

そこで、義姫と話し合い、小次郎と小原を殺したことにして、小次郎の身を小原に託し、寺に逃がしたのではないか。二人の墓が横山にあるのも、アリバイ作りの一環だろう。

政宗と義姫との関係は、おそらく幼い頃からぎくしゃくしていたが、かなりの部分は、政宗の思い込みだったのではないか。

政宗は後年、疱瘡にかかった際に義姫が見舞いに来なかったと語っている。そうした体験から、義姫は弟だけをかかわり、自分を疎んじている、自分はいずれ亡き者にされて弟が跡を継ぐ、義姫の背後には敵対する最上義光がいる…そんな不安が徐々に育まれたのではないか。

政宗が小田原の秀吉に会いに行くとき、一番心配だったのは、自分の留守中に小次郎を擁立した内乱が起きかねないことだった。

政宗は、それまで胸のうちに抑えていた不信感を率直に義姫に伝え、それを聞いた義姫も政宗の思いを汲み取り、そこで考えられたのが、この狂言ではなかったか。

二人で申し合わせていたのなら義姫が最上に逃げ帰ることはなかったのでは、という見方もあるが、4年後ということに意味がある。

政宗が家臣の鬼庭綱元に、事件の直後に与えたと思われる手紙がある。

そこには義姫が政宗を殺そうとしたが、背後には義姫の兄・義光がいるという噂があり、その通りだと思う。このままでは小次郎を守り立てる側との間で内乱になりかねない。毒を盛ったのは母だが、殺すわけにはいかないので、可哀そうだけど弟を殺すことにしたとある。

そして最後に、信頼しているお前にだけはこの事実を話しておくので、お前が斟酌して、いいと思うことは世間へ口説き広めてほしいと書いている。

この指示から、「政宗は義姫に毒殺されそうになって弟を殺した」と言う噂が、徐々に浸透していった可能性がある。

やがて義姫は、周囲の自分に対する目が厳しくなってきたことに耐えられなくなって、実家に帰った。あるいは、帰ることで義姫が政宗を毒殺しようとしたことが真実だったと思わせようとしたのかもしれない。

政宗が大悲願寺に立ち寄ったのは、秀雄に会うためであったと、地元では昔から言われていた。秀雄は当時、住職・海誉上人の弟子になっていたからである。寺には、政宗らに贈られた茶壺もあるという。つまり記録は残っていないが、大悲願寺には何度か行っている可能性がある。

すると、なおさら秀雄、つまり小次郎と会うことが目的だったと思えてくる。

事件当時、政宗は 24 歳、小次郎は 10～12 歳と推定される。しかし事件の翌年、政宗の初めての実子・秀宗が生まれる。後継者ができた時点で小次郎が復活する必要はなくなった。逆に、生きていることが知られてはまずい。

政宗は、小次郎が一番気の毒だと、負い目をかんじていたのではないか。だから、会いに行った。本当に気の毒なことをしたと、謝る以外の気持ちはなかったのだろう。

政宗が大悲願寺で白萩を眺めた 2 か月後の 8 年 10 月、最上家の改易により、義姫は山形から仙台の政宗のもとに戻って、その 9 カ月後に亡くなった。

大悲願寺で小次郎と会っていたとすれば、政宗はその様子を義姫に伝えていたかも知れない。あるいは、最上家改易の噂は以前からあり、大悲願寺で、政宗と小次郎が、義姫の処遇について話し合ったかもしれない。

その時、親子三人に去来した思いとは、いかなるものだったのか。

いずれにしても、秀雄が小次郎とは断定できないが、私はその可能性は高いと考えている。そして小田原参陣とは、伊達家にとってかように大きな犠牲を払うほどの、重大な曲面だったのである。

以上、佐藤憲一著『素顔の伊達政宗』より引用

3-4. あとがき

小田原参陣は政宗の曲者ぶりが発揮されていて痛快である。

このように新史料が出てきたときには歴史を見直して頂きたいものである。

4. 空海のある一面

4-1. 前書き

空海（くうかい、774～835 年）は平安時代初期の僧であり、弘法大師の名でも知られる真言宗の開祖である。讃岐国で生まれた。日本の宗教界では最も名を知られ、「お大師さん」といわれて大衆に親しまれている。



東院伽藍を正門より

生誕地に因んで建立された善通寺
（善寺派総本山）
父親の善通（よしみち）の名前を使った
と云われる。
生誕は近くにある母親の実家の屏風ヶ浦。

天台宗の開祖・最澄とともに、日本仏教が奈良仏教から平安仏教へと転換していく流れの劈頭（へきとう）に位置し、中国より真言密教をもたらした能書家としても知られ、三筆（注. 2）の一人に数えられている。

注記. 2 三筆

三筆は、日本の書道史上の能書のうちで最も優れた3人の並称であり、平安朝初期の空海、嵯峨天皇、橘逸勢（たちばなはやなり）のこと

空海人気にあやかった、いわゆる空海伝説なるものは別にして数々のエピソードを残している。

書道、漢詩は並外れており、日本で最初の小説（戯曲）『三教指帰（さんごうしいき）』を書いたとか、地元の溜池・満濃池の堤防を築いたこともあり、土木、薬学、気象学も習得していた天才であり、習得した知識を巧みに駆使して皆を驚かし、尊敬の念を抱かせるように仕向けるワザと話術を持っていた。まさにエンターテイナーである。謎の多い天才であり、我々凡人には到底推し量れないのだろう。

最も驚くのは、中国の長安にある青龍寺の恵果和尚から、密一乗の伝法を受けたことである。当時、和尚の門人は千人と言われていたが、その門人たちを差し置いて、日本から行ったばかりの空海が、西安に着いてからわずか半年ばかりで門人の筆頭になっただけでなく、その教法の王位を継いだ。胎蔵界の灌頂、金剛界の灌頂、伝法の灌頂を得たことだ。（かんじょう、灌頂とは、密教において、頭頂に水を濯いで、諸仏や曼荼羅と縁を結び、種々の戒律や資格を授けて正当な継承者とするための儀式のことをいう。）恵果和尚はそれから4カ月ほどで亡くなった。

まるで手品か、魔法のようで驚くばかりだ。その経緯はとても説明できないので、興味のある方には、司馬遼太郎著の『空海の風景』（少々難解だが、史料を明確にしている）をお勧めする。最澄との「交友と絶縁」他もよく理解できる。また‘空海大好き人間’（夢枕氏が講演でそう言った）の夢枕獏氏の「唐の国にて鬼と宴す」（痛快である）をお勧めする。

空海のエピソードが分かり易いので、由良弥生著『眠れないほど面白い空海の生涯』を読んでみたいと思う。

4-2. 空海と最澄の交友と絶縁

空海はとても語り尽くせないが、ここでは空海と最澄の「交友と絶縁」について触れてみたいと思う。このことは一般にはそれほど知られていないと思う。



高野山壇上伽藍

比叡山延暦寺大講堂

空海はわが郷土の英雄で誇りに思っているが、残念なことに、空海のうさん臭い一面が見えてくる。空海をどう鼻屑目に見ても最澄が気の毒に思える。

以下、引用する

- 二人は9世紀初頭、およそ10年間だけ交友を持ち、その後に絶縁している。
- 隣国「唐」が全盛を誇った804年、第16回遣唐使として、二人は唐に留学。最澄は桓武天皇に法華経の講義を行うほどのエリートで、官費留学生だった。空海はまったくの無名僧で自費留学生だった。
- 風向きが変わったのは空海の帰国後、806年ごろだった。国内の皇族や貴族が、最澄が主として学んできた天台教義でなく、空海が留学先で修行した密教に興味を示したのだ。密教に造詣の深くない最澄は困り果てた。そこで、プライドを捨て、7歳下で身分も低かった空海に「弟子入り」する。両者の交流が本格化したのはこのころからだ。だが、最澄自身もまた、多くの弟子を抱える身。そこで、文字を通じて密教の心得を教わるべく、空海に何度も手紙を送る。
- そんな最澄に対し、空海は「密教は体験によってのみ学ぶことができる」と冷ややかな態度を取り続ける。空海は僧としては最澄よりも「格下」。最澄は怒りをこらえ、自分の一番弟子を空海のもとに派遣し、弟子を通して密教を学ぼうとした。
- だが813年、最澄の堪忍袋の緒が切れる。きっかけは、空海の持つ密教の経典「理訥釈経」を、最澄が借りようとしたことだった。空海はこの依頼に対し、最澄を「お前」呼ばわりするなど、罵詈雑言を以て返信した。平身低頭だった最澄も、この対応に激昂。以降、両者の関係は途絶える。
- とはいえ、空海と最澄は816年に、もう一度だけ手紙でやり取りをしている。「預けていた一番弟子を返してほしい」と、最澄が手紙を送ったのだ。空海の答えはもちろん「No」。「仏心とは大慈悲これ也」とは釈迦の言だが、二人の高僧に待っていたのは、なんとも無慈悲な別れだった。(森)

『空海の風景』にはこれについて詳細に書かれている。

4-3. あとがき

空海が語ろうとしなかった空白の7年間というのは、中国への渡航費（現在のお金で1億円ほどと言われる）を捻出するために水銀で稼いでいたのだろう

との見方で一致している。晩年、水銀中毒の症状が出ていたことは周知されている。

伊勢・高野山・四国 88 か所の 21 番札所である徳島太龍岳は一直線上にあり、水銀鉱脈と重なる。この辺りには「丹生（にう）の里」と呼ばれる水銀の採掘と精錬を行う集落が点在していた。空海はそこで鉱山技師をしていたといわれる。

当時、水銀は貴重で高価だった。仏像に金メッキするにも、金を水銀アマルガムにして塗布し、加熱して水銀を蒸発させる方法しかなかった。神社仏閣の朱色は猛毒の硫化水銀が使われていた。

丹：硫化水銀からなる赤色の鉱物

このことは決して批難されるようなことではなくて、むしろそれまでして仏教を学ぶために中国に渡航して密教を学び、それを足掛かりに真言宗を開基し、栄達を極め、後世に名を轟かせているのは驚嘆に値する。

5.家光の生母は春日局？

5-1. 前書き

あるときにテレビの番組をチェックするためにチャンネルを廻していて偶然見た番組で、今は亡き著名な歴史家の山本博文名誉教授にMCが「福田千鶴氏が『徳川家光の生母は春日局（お福）』説を唱えている。根拠は徳川実紀と稲葉家の家系典（ここでは福田氏の著書を引用すると①通称『徳川実紀』と呼ばれている、将軍家の蔵書を保管した紅葉山文庫に伝来する『松のさかえ』の中に家光のお腹は春日局とある。②お福の嫁いだ稲葉家の家系典に、秀忠公のご簾中の崇源夫人（お江）の侍女となった。容色が美麗であったので、将軍の胤を宿し慶長 9 年 7 月 17 日に竹千代君が誕生した。実父（齋藤）利光（としみつ、明智光秀の家老で信長に対する謀反人。光秀に謀反を強く迫ったという説もある。）の由緒を嫌い、ご簾中の出産として披露した。福は乳母となった。』」ですが、先生はどのように思われますか？」と質問していた。それに対して「どちらも読んでいるので知っているが、150 年～200 年ほどの後で書かれたものなので信じない。生母は『お江』（おごう）と思っている。徳川実紀は他にも明らかに事実と異なることが書かれている」との回答だったが、200 年も経って何故、わざわざ嘘を書いたのか？嘘を書くメリットはないはずだし、書かれたことが嘘だと思うなら、歴史家はその理由を推論して我々に説明すべきではないかとの疑問が残った。素人的には、「幕府内では周知の事実だし、そろそろ潮時と思ったので本当のことを書き残した」のではないかと思われる。

小和田先生の講演会の最後の質問コーナーで、司会者が何でもよいというので、講演の内容以外の質問をしてもよいのかどうか迷ったが、「歴史好きの者

ですが、家光の生母は春日局とっていますが、先生のお考えとその根拠をお聞きしたい」と質問した。

親切にも回答していただきました。「福田千鶴さんの著書も読んで、その説を知っているが、生母はお江と思う。確かにお福が公募で乳母に選ばれたというのは疑問がある。それ以前に大奥に女中として奉公していた可能性はある。しかし、大奥についていろいろと調べているが、不倫という表現が良いのかは分からないが、大奥はそのようなことができる場所ではないと思うからである。」

司会より、それでいいですか？と言われたときに、「分かりました。有難うございました」と、とっさに言ったが、正直なところ、そのときは意外であり、驚いた。家光の弟・保科正之は秀忠が大奥で女中と不倫？して生ませている。家光が将軍になってから弟として認知して会津藩主に取り立てた。

それに家光の生まれる前に大奥で秀忠の長男・長丸が生まれた。(徳川氏の正式な系譜である『御家譜』では母は家女(奥女中)とし、詳細は伝えていない)早世して、不審な死に方とされ、お江が指図して殺めたとの話もある。保科正之が生まれたときには、秀忠がそれを懸念してすぐに高遠藩に養子に出したとされるので真実味がある。

嫉妬深いお江は側室を認めなかったが、秀忠はそれなりに大奥で後継作りに努力していたのだ。決して不思議なことではないとの思いが去来したが、これ以上の質問は避けるべきと思った。

後日、調べたら、先生はお江を生母とした「春日局」の著作があるのが分かり、知っていれば無神経な質問をしなかったのにと反省した。

小説家だけでなく、ほとんどの歴史家もお江生母説の著書を出しているのだ。

5-2. 春日局が家光生母説の紹介

福田千鶴氏によれば(著書より抜粋)

- ① 系図上で位置づけられた女性が必ずしも生母とはかぎらないこと。
- ② 長男・長丸の母はお江ではないので、秀忠に侍妾がいたことが明白であること。(嫉妬深いお江には内緒と思われる)
- ③ お江が全員の母であれば、足かけ 11 年間で 8 人を産んだことになる。そのうちの数人は侍妾から生まれて、お江は表向きの母になったと考えた方が武家社会の慣行に基づくこと。
- ④ 慶長 8 年 7 月にお江は伏見で次女子々を出産した。(家光は慶長 9 年 7 月 17 日誕生)その間、秀忠は江戸にいて二人は別々の場所にいた。よってお江が家光を出産するのは難しいこと。(お江は伏見にいて、秀頼に嫁いだ千姫に付き添っていた)

- ⑤ 家光の出産はお江を母とした場合、明らかに産み月が足りないにも関わらず、家光は平産だったこと。
- ⑥ 徳川家の嫡子でありながら、家光の幼少期の事績が曖昧であること。
- ⑦ 家光誕生時につけられた小姓が、親の地位が低く、また長男ではないこと。
- ⑧ お江が家光の誕生日を公表しなかったこと。
- ⑨ お江の葬儀は、家光でなく、忠長が担当したこと。
- ⑩ お江は大御所秀忠の妻、現将軍の母であるにもかかわらず、その死後に従一位を贈ることに否定的な公家がいたこと。(生母ではないとして)

5-3. 経緯を推察する

家光が生まれたときにお江は年齢的にもう出産は無理かも知れない。特に男子がこの先に生まれないうちかも知れないと思っていたとしたら、‘お福が産んだ家光を自分の子として世継ぎにすることに同意し、お福には乳母として家光を育ててもらおう。そして次期将軍家光が謀反人齋藤利光の孫であることは絶対に秘すこと’が必要だった。そのため、家光誕生以前に大奥にいたことも伏せる必要があった。そこで乳母を公募したことにした。

- ① お福は乳母の公募で採用したことにする。
公募したとして、謀反人の娘を乳母に選考することは不自然で、あり得ないだろう。将軍家が乳母を公募すること自体がもっと不自然である。いくらでも乳母の候補はいたはずで、将軍家の威光でどうにでもなるはずだ。無理筋だと思われるような説明をせざるを得なかったのだろう。
- ② 何故謀反人の娘が大奥にいたのか？
お福が稲葉氏と離婚し、露頭に迷っていた。それを知った家康が不憫に思い、口を聞いて大奥に世話をした。齋藤利光が石田三成に強く働きかけて本能寺の変(注.3)が起こり、そのおかげで天下を取れたと認識していたからだろう。しかし、まさかお福が次期将軍の生母になるとは夢にも思わなかったであろう。
- ③ 50年～200年後になって、お江が家光の生母であるなら、春日局が生母だったとわざわざ『徳川実紀』に嘘を書く理由などあろうはずがない。春日局が生母であることが周知されていたとすると『徳川実紀』に書いたことが理解し易くなる。
それ以外に春日局生母説の根拠は以下である。
 - ・家光が春日局の子で、二男・国松がお江の実子であれば、お江の国松に対する溺愛ぶりも納得できる。

- ・老中や諸大名が弟・国松に挨拶に行くが、家光のところには行かない。秀忠夫婦が国松をかわいがるので、忖度した結果といわれているが、家光がお江の子でないことを知っていたからだと思う。
- ・家光が両親より、春日局を親しんでいたこと。むしろ両親を憎んでいたようにも思われる。
- ・家康に働きかけができたこと。
- ・天皇に拝謁し、春日局の名を賜ったこと。
- ・老中をもしのぐ、権勢を持っていたこと。いくつもの（4～5だったと記憶している）屋敷を持ち、そこで諸大名の挨拶を受けたこと。毎日のように多数の大名たちが訪れてくるので複数の屋敷が必要だった。
- ・命を懸けて家光を守り、尽くしたこと。
- ・家光が春日局の実兄・斎藤利宗を5千石の旗本として取り立てている。
（旗本は主として徳川将軍家直属の家臣団のうち石高が1万石未満でお目見以上の家格を有する者であり、謀反人の息子を取り立てるのは破格のことである。）

5-4. まとめ

謀反人の子として生まれた春日局が将軍の世継ぎ候補の乳母となり、育成し、命を懸けて次期将軍になるように奔走して、生涯にわたり将軍を見守り、老中をもしのぐ権勢を得たのであれば、歴史上稀なことであり、後世の人間には面白い話である。（童門冬二氏は著書『歴史の仕掛人』の中で橋三千代（藤原不比等と結婚し7世紀末～8世紀前半にかけての宮廷で権勢を振るった）と似かよっているとしている。）

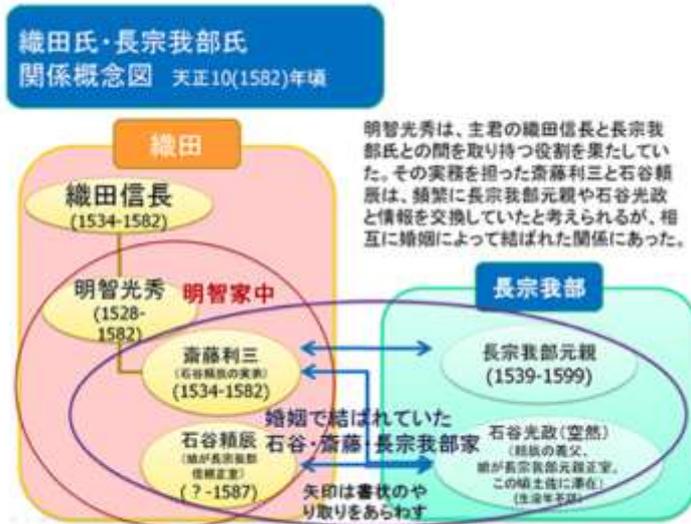
女性として想像もできないような権力を確立したことが面白いのだ。（しかし、春日局が将軍の生母であれば状況がかなり異なる）

芝居でも想像を絶した乳母の春日局の活躍を喧伝してきた。のちの世に『徳川実紀』に春日局が家光の生母と書いても、長らくお江を生母としてきたのでそれが世間では史実になってしまったのだろう。覆してしまうと小説、歴史書ともに面白さが半減するので、誰も覆そうとしないのだろうか。生母が権勢を誇る例はあまたあって、ごく当たり前であって、芝居にしてもそれほど面白くないのかもしれない。むしろ生母の過度の権勢欲には嫌悪感を覚えることがある。

芝居や小説だけでなく、お江生母説の著作を発表してきた歴史家がほとんどある。お福を生母として認めた場合、作家は困らないとしても（困るかも知れない？）歴史家は困惑してしまうのだろう。そっとしておきたいのではないかと勘繰りたくなる。

注記.3 本能寺の変

諸説あるが、信長の四国攻めが要因とする説がある。
 信長が長曾我部元親に‘四国は切り取り次第所領してもよい‘朱印状を出していたとされる。そして、元親は阿波岩倉城の三好康俊を服属させた。秀吉は毛利攻めのために三好水軍を味方に付けようと三好康永（康俊の父）に接近する。他のこともあり、信長は三好寄りに政策を変更し、長曾我部氏と三好氏が協力するように‘と朱印状を出した。交渉役の明智光秀（実質は家老・齋藤利光）が奔走したが、信長の方針変更を不服とする長曾我部元親との交渉は決裂。信長が四国攻めを決心したことを受け、光秀は元親を説得。元親が説得に応じたにも関わらず、四国攻めの方針は変更しなかった。（変更しなかった理由は諸説ある。）
 交渉役・光秀の面目が潰れたこと、長曾我部家を守ろうとしたことが謀反の主原因とする説が増えてきた。（謀反の理由について光秀が何も語っていないし、書状も見つかっていない）
 光秀に謀反を迫ったのが齋藤利光だったという説もある。
 元親の妻は利光の妹で、光秀のいとこか姪にあたるくらいの近い親戚で、光秀と元親は親戚関係にある。
 信長は四国攻めに向かうために本能寺に滞在していたところを襲われた。



5-5. 最後に

春日局の辞世の句は「西に入る月を誘い、法をへて、今日ぞ火宅をのがれけるかな」である。現代語訳は「西の方へ没していく月を心に留めながら、仏の教えに従い、やっと今日悩みの多いこの世から逃れることができます。」である。

自ら創建した麟祥院に建てられた墓は特徴があり、四方に貫通した穴がある。ご政道を見守る目だそうで、死後も家光と徳川家の安寧を願い続けるという強い意志が伝わってくる。実母の執念を感じる。

「黄泉（よみ）からも天下のご政道を見守れる墓」を作ってほしいという遺言によってこのような形で建立された。



春日局の墓

以上

6. 豊臣秀頼の父親は秀吉ではなかった？

6-1. 前書き

小和田先生の講演のとき、同年配の女性が、私の質問に続き、「秀頼の父親は本当に秀吉だと思いますか？」と質問した。

先生は「秀吉だと思う。やはり、家光のときと同じように、と言っても大奥があるかどうかの条件は異なるが、不倫するような環境に無かった。秀吉は確かに子供ができにくかったが、長浜時代に子供ができたという話が残っている。子種が無かったとは思えない。」と。

6-2. 秀頼の父親について

調べてみた。

引用すると

秀吉の子供は長浜城時代の側室・南殿との間に生まれた石松丸と娘、淀殿との間に生まれた鶴丸、秀頼の4人とされている。

それ以外は永く一緒に暮らした正室・おね(北政所)はもちろん、大坂城には京極童子、甲斐姫、摩阿姫(前田利家の娘)織田信長の6娘・三の丸など16人の側室が暮らしていたが、誰も子供が生まれなかった。

京極童子は、秀吉の側室になる前に、結婚相手との間に3人の子供をもうけていたが、秀吉の子を妊娠することはなかった。

秀吉が美人の側室を伊達政宗の家臣に与え、最終的に伊達政宗の側室となると、2人の子を産んでいる。

・長浜城時代の儲けた石松丸

6歳で夭折したと伝わる石松丸・秀勝が秀吉の子という説がある。母親は'ねね'ではなく側室の南殿と言われている。

秀頼が秀吉の子である可能性は極めて低い。

秀吉以外の候補として有名なのは大野治長である。

大野治長は、茶々(淀殿)を小さいときから世話をしてきた乳母・大蔵局の子である。

茶々と治長は乳兄弟に当たり、権勢をふるっていた母・大蔵局を通じて、治長は度々茶々と顔を会わせる機会があったものと考えられる。

その他に、無名法師(陰陽師)、名古屋山三郎、石田三成などが候補と言われている。

6-3. まとめ

絶大な権勢を誇っていた秀吉の目を盗んで淀殿と深い関係になる無鉄砲な側近はいなかったと思われる。将軍がお女中と接するのはわけが違う。

注目すべきは陰陽師である。

言わずもがなであるが、当時は不妊治療も人工授精の技術もなかったので、商家などで跡継ぎが出来なくて困っているときには祈祷師に頼っていた。神社仏閣に籠って一晩中祈祷してもらうのだ。

祈祷師も祈祷の効果が無いことは良く分っているし、依頼者が妊娠しなければ商売にならないので、祈祷すると同時に睡眠薬のようなものを使って意識を朦朧とさせて、依頼者には何が起きたか分からないような状態にしてから、自分や複数の屈強で健康(子が健やかに育つことを期待して)な若者が接して妊娠させていた。複数が接することによって誰が父親か分からないようにして、のちのトラブルを避けたと言われる。勿論、妊娠し易い時期を推しはかって祈祷していた。まことに霊験あらたかな祈祷だったのだ。

淀殿も祈祷をしてもらったのちに鶴松を生んでいる。この時には秀吉の許可を得て祈祷したと推測できる。当然、秀吉も淀殿も祈祷のからくりは知らなかったのだろう。からくりは後世に明らかになったのだろう。

鶴松が死去後に秀頼が誕生した。

・誕生前、朝鮮出兵のために秀吉は九州の名護屋城にいた。淀からの懐妊の知らせに、秀吉は「自身の子(鶴丸)は亡くなった。(今度の)淀殿のお腹の子は淀殿一人の子供にしたらよい」と手紙を出している。

1592年4月に釜山に上陸した。そして1593年7月に休戦し、その後秀吉は大坂城に戻っている。1年2か月ほど名護屋城に滞在していたとされる。子種の有無の話どころではない。宣教師のルイス・フロイスも‘秀頼が秀吉の子とは誰も思っていない’と書き残している。いくら何でも秀吉自身もそのように思っていたはずだ。

それにしても淀殿は大胆なことをしでかしたものだ。

・朝鮮と和睦後、名護屋城から大坂城に戻って秀吉は、秀頼が1593年8月3日に生まれたあとの10月に、大坂城にいた大勢の女房や仏僧を処刑・追放している。淀殿付きの女中を成敗し、陰陽師を追放している。

秀頼に跡を継がせようと考えて、秀頼の誕生にまつわる関係者を静粛したのではないかと考えられる。陰陽師は単にうさん臭いことを怪しまれただけでなく、父親の可能性を疑われたのかもしれない。女中は管理不行き届き、あるいは積極的に淀姫をそそのかしたことを問われたのか？

しかし、淀殿に関しては、織田家の血を継いでおり、更に世継ぎと決めた豊臣秀頼の生母でもあることから、不問に付したと考えられる。



秀吉が小柄で猿とあだ名がつけられていたのに対し、秀頼は長身（2メートル近く）でイケメンだったと言われている。

7. 宇佐八幡宮神託事件と道鏡

弓削道鏡は奈良時代の僧侶で平将門、足利尊氏ともに日本三悪人と称されることがある。偉人とは言えないが、誰もが知る有名人である。

道鏡が孝謙天皇（称徳天皇）に取り入って皇位をうかがい宇佐八幡宮神託事件を起こした張本人とされるが、当時の史料にそのようなことを示す記録は見

当たらない。後世、憶測か創作により出来上がったストーリーだろう。女帝が道鏡に恋い焦がれて、一方的に官位を与え、ついには天皇に即位させるために宇佐八幡宮神託事件を引き起こしたと考える方が納得し易い。全て女帝が自分の為に実行したことである。道鏡はただひたすら、天皇の愛に応えただけのようであろう。宇佐八幡宮神託事件の前後にもみられるような女帝のさまざまな言動が、それを示している。道鏡が決して権勢欲を欲していなかったことを政権のだれもが分かっていたようだ。野心のある弟の浄人（きよひと）が道鏡を利用して地位や権勢を得ようとしたことが混同されているようだ。その証拠に道鏡の唯一の擁護者の天皇が崩御したあと、道鏡は処刑されることなく、ただ、それまでの官位を剥奪されただけで、下野の薬師寺別当に追いやられただけなのだ。宮中では全て周知のことだったのであろう。下野の薬師寺は名刹である。天皇に巡りあうことがなければ、この程度の地位に落ち着いていたのかもしれない。（「経緯は歴史をさわがせた孝謙天皇」を参照下さい。）



宇佐八幡宮

最近、‘現代の道鏡’とか揶揄されて世間を騒がせている御仁が話題になっているようだ。いろいろと報道されていて、その真偽のほどは分からないけれども、少なくともご自分で書いて公開した文書には、うさん臭さがプンプン漂ってくる。

もし道鏡が自分の名前が出ているこの報道を知れば驚いたのではなかろうか？「自分は違う。世間から見れば、権勢欲の権化で女帝に取り入って権勢を得、更には天皇になろうとしたと映るかもしれないが、自分からは一切働きかけず、ただひたすらに女帝の愛や要望に応えただけである。うさん臭いことはしていないし、元々野心は持ち合わせていない。弟の浄人（きよひと）は野心家で勝手に私を利用して地位や権勢を得ようと暗躍したかもしれないが」というのではないかと変な妄想が浮かんでくる。

8. 「女地頭次郎法師」と「井伊次郎直虎」

女の「次郎法師」が「井伊次郎直虎」（注.4）を名乗って朱印状を出したとされ、「女城主直虎」として有名になった。が、二人は別人であるとの書状が

発見された。「女城主直虎」は後世につけられた名だが、実在しなかったことになる。



情

NHK 大河ドラマ「女城主直虎」より

ある講演会で、「戦国時代に活躍した女性」と題する小和田哲男先生の講演を拝聴した。丁度NHKの大河ドラマ「女城主直虎」の公開前で、その番組を念頭に置いたお話で興味深かった。丁度、次郎直虎の名で花押を押した「城主次郎直虎」は別の男性で、従い「女城主直虎」は存在しなかったという文献が見つかって騒がしい時期だったので、それに触れて次郎法師が直虎でなかったにしても「女地頭」として城主として統治していたことは間違いないと言われて、新説を受け入れるつもりがあると感じた。「女城主直虎」と「次郎直虎」と二人いたとする歴史家もいて、新史料を後世のものとして認めない歴史家もいて見解が分かれているようだ。

注記 4. 「次郎法師」と「井伊次郎直虎」

「おんな地頭（領主）次郎法師」に書いたが、ポイントは、井伊家は小国で今川の支配下にあった。井伊直盛には女子しかいなかったの、従兄弟の直親を養子にして跡継ぎとした。女の子は「次郎法師」（次郎は井伊家総領の名前）という男の名前を付けて、瓢箪寺に出家させた。男は還俗できることがその理由だったらしい。直親が死去し、井伊家の領主が途絶えたので次郎法師が還俗して領主となった。この時代、女性が地頭になることは認められていた。次郎法師が署名し黒印を押印した書状・黒印状が遺されている。この時代、朱印は男性にしか認められていなかったの、女性は黒印その他を押印したとされる。今川が徳政令の発行を次郎法師に迫ったが、なかなか応じなかった。2年後になってやっと徳政令が発給された。「井伊次郎直虎」の署名で朱印を押印していた。これが永く、次郎法師が直虎と改名し、朱印状（朱印を押印した）を発給したとされ、女性の朱印状は他に例がなく珍しいとされてきた。が、最近になって今川家の家臣関口氏経の若い息子が井伊家に送り込まれ、「井伊次郎直虎」と名乗ったとする書類が見つかった。従い次郎法師と次郎直虎は別人である。しきたりに従い、女性の次郎法師は書状に黒印を押印し、男性の次郎直虎が朱印状を発給しただけなのだ。今川家が徳政令を発給しない次郎法師に業を煮やし、一方的に次郎法師を領主の座から降ろして、新たに城主・次郎直虎を送り込んだとするのが妥当だろう。その直後に桶狭間で今川義元

が戦死し、今川家は滅亡に至り、その辺りの記録が残らなかった。一方井伊家は生き延びて徳川四天王として栄えたので、不名誉な話は表に出さなかったのだろう。

9. 北の庄城は炎上しなかった？（偉人ではないが）

柴田勝家、お市の居城である。

小和田先生が講演で「自分是大河ドラマの時代考証をしている。柴田勝家の北ノ庄城が落城する場面で、お市の方が娘3人を城から逃がし、夫婦ともに城内で自害するが、淀たちが落ち延びるシーンではいつも‘淀姫たちが天守閣の炎上しているのを振り返って、母親の死を悟る’ことになっている。監督に‘ドラマはかならずしも史実に忠実である必要はないが、北ノ庄城の天守閣は燃えていないことを示す資料がある。今回は炎上することだけは容認出来ない’と強く言ったので、ついに監督が折れて炎上しないことを承諾してくれた。

しかし後日テレビを見たら、天守閣が激しく炎上していた。あとで監督は‘あの場面は炎上シーンがないと淀たちがお市の死を知り、別れを告げることが表現できない’と言われた。」と話された。



先生は天守閣が炎上していない裏づけをもっと説明してくれたのかも知れないが記憶にない。あとでネットを調べたら、いずれも‘勝家が自害する前に城に火をつけた’とか‘天守閣が炎上した’となっている。その根拠は分からなかった。‘炎上が史実’となってしまうのかもしれない、そうなるも歴史の大先生がいくら声を大にしても世間には届かないのかもしれない。

その時には本当に炎上したかどうかより、「ドラマといえども重要な特定のことに 대해서는できるだけ史実に忠実にすべき」と考えておられることが印象に残った。

以上